



**2nd**

# **organ concert**

**2005/11/20(SUN)**



**open**

**15:45**

**start**

**16:00**

**place**

**900 Hall**



**By organ club**

## ～Prologue～

本日はお忙しい中お越しいただき、まことにありがとうございます。

前回の演奏会からおよそ半年、再び演奏会を開催することができました。これもひとえに、日ごろ皆さまより暖かい御厚意と格別のお計らいあつてのことであり、この場を借りて感謝申し上げます。

さて、前回の演奏会のテーマは「オペラ座の怪人」、すなわち夜の900番講堂に集う不審集団こと我々オルガン同好会のことでした。今回の題目はと申しますと、このプログラムを手にとって下さっている皆様にはもうお分かりかと存じますが、「マリオ」です。蛇足ながらここでマリオについて解説いたしますと、マリオとは1985年（ちょうど今年で20周年）に任天堂から発売された「スーパーマリオブラザーズ」の主人公で、現在世界中で愛されているキャラクターであります。

「マリオ」とかけてこの演奏会と解く、その心は「パワフルでハチャメチャ」とでも言えましょうか。ともあれ、

「マリオ」の音楽は、その独特のメロディとリズム、そして、その背後に隠れた物語の世界観が、聴き手の中に響き渡り、心を捉え、そして、心を癒す。そんな、

「マリオ」の音楽の世界に、ぜひとも、

「マリオ」の音楽の世界に、ぜひとも、

「マリオ」の音楽の世界に、ぜひとも、

「マリオ」の音楽の世界に、ぜひとも、

「マリオ」の音楽の世界に、ぜひとも、

「マリオ」の音楽の世界に、ぜひとも、

「マリオ」の音楽の世界に、ぜひとも、

「マリオ」の音楽の世界に、ぜひとも、

# ～ Program ～

Opening      Super Mario Brothers : Main Theme

## マルティン・ルター

Martin Luther(1483 – 1546):

キリストを、われらさやけく頌めたたうべし

Christum wir sollen loben schon

高き天よりわれは来たり

Vom himmel hoch da komm'ich her

天にましますわれらの父よ

Vater unser im Himmelreich

Organ: 鹿島 真人 Masato Kashima

## ジローラモ・フレスコバルディ

Girolamo Frescobaldi(1583-1643):

《 フィオリ・ムジカーリ (音楽の花束) 》

主日のミサより 「ミサの前のトゥッカータ」

「クレドの後のリチェルカーレ」

Fiori Musicali

Toccata Avanti la Messa della Domenica,

Recercar dopo il Credo

Organ: 大木 真人 Masato Ohki

## J.S. バッハ

Johann Sebastian Bach(1685 – 1750):

コラール前奏曲 《 我汝をよばわる、イエス・キリストよ 》

Choralvorspiele Ich ruf' zu dir, Herr Jesus Christ BWV 639

Organ: 柴田 康太郎 Kotaro Shibata

## モーリス・ラヴェル

Maurice Ravel(1875 – 1937):

### 亡き王女のためのパヴァーヌ

Pavane pour une infante defunte Pavane pour une infante defunte

Organ: 江間 有沙 Arisa Ema

Flute: 平澤 歩 Ayumu Hirasawa

## ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー：〈くるみ割り人形〉組曲 より

Peter Ilyich Tchaikovsky (1840 - 1893): The Nutcracker – Suite (Excerpt)

### ・ 行進曲（第1幕）

Marche

### ・ こんぺいとうの躍り（第2幕）

Danse de la fee-Dragee

### ・ アラビアの踊り（第3幕）

Danse Arabe

Organ: 柴田 康太郎 Kotaro Shibata

## フリッツ・クライスラー

Fritz Kreisler(1875 - 1962):

### 前奏曲とアレグロ

Praeludium und Allegro

Organ: 鹿島 真人 Masato Kashima

Violin: 江間 有沙 Arisa Ema

## J.S.バッハ

Johann Sebastian Bach(1685 – 1750):

**8つの小プレリュードとフーガ 第4番 ヘ長調**

**第5番 ト長調**

“Acht kleinen Präludien und Fugen”: Präludien und Fugen f-Dur BWV556,

Präludien und Fugen f-Gur BWV557

Organ: 長嶋 由紀子 Yukiko Nagashima

## J.S.バッハ

Johann Sebastian Bach(1685 – 1750):

**フーガ ト短調: 《小フーガ》**

Fuge g-moll BWV578

Organ: 大木 真人 Masato Ohki

## J.S.バッハ

Johann Sebastian Bach(1685 – 1750):

**《フーガの技法》 より 対位法第一曲**

Contrapunctus 1: Die Kunst der Fuge BWV1080

**トッカータとフーガ 二短調**

Toccatà und Fuge d-moll BWV565

Organ: 平澤 歩 Ayumu Hirasawa

Closing Super Mario Brothers: Underwater Theme

## ～ Program Notes ～

マルティン・ルター：賛美歌の主題による J.S.Bach 手鍵盤コラール より

Christum wir sollen loben schon 『キリストを、われらさやけく頌めたたうべし』

元のコラールは、マルティン・ルター作曲(1524)のクリスマス賛美歌。

430 年頃に作られたとされる、C.セドゥーリウスのラテン語讃歌

A solis ortus cardine に基づく。

Vom himmel hoch da komm'ich her 『高き天よりわれは来たれり』

マルティン・ルター作曲(1535)のクリスマスの賛美歌によるフーガ調変奏曲。

Vater unser im Himmelreich 『天にましますわれらの父よ』

マルティン・ルター作曲(1539)の教理問答歌、主の祈りの主題による変奏曲。

(文責 鹿島)

ジローラモ・フレスコバルディ：(フィオリ・ムジカーリ(音楽の花束))

フレスコバルディは、初期バロック時代全盛期のイタリアで活躍した代表的な作曲家です。弱冠 25 歳にしてローマの名門サン・ピエトロ大聖堂のオルガニストに任命され生涯その地位にありました。最先端の技法と革新的な発想によって書かれた多数の優れたオルガン作品で知られています。

フィオリ・ムジカーリ(音楽の花束) は、フレスコバルディの代表作で、カトリックの礼拝のために書かれた実用的なオルガン曲集、いわゆる「オルガン・ミサ」です。今日演奏する 2 曲は其中でも礼拝の前や途中の空き時間に使われるもので、形式上の制約が多いオルガン・ミサの中では比較的自由的な書法で書かれています。

「ミサの前のトゥッカータ」は、礼拝の始まりを告げる重厚な和音で始まり、テンポを激しく変化させながら曲想を変え、最後はまた重厚な響きへ戻っていきます。J.S.バッハの 100 年前とは思えないような現代的な書法で、不協和音やテンポの変化などフレスコバルディの音楽の特徴がよく現れています。

「クレドの後のリチェルカーレ」は、クレド（礼拝の式次第の一つ「信仰宣言」）の後に演奏される楽曲で、彼の得意とする厳格な対位法（独立した複数の旋律を重ね合わせる書法）が用いられています。この曲は別名「半音階的リチェルカーレ」として知られ、半音進行する独特の旋律が曲に峻厳な雰囲気を与えています。「リチェルカーレ」とは、このような模倣的（同じ旋律が何度も使われる）な対位法の形式のことをいいます。

フレスコバルディの作品の影響力は大きく、彼以後のバロック・オルガン音楽はすべて彼の影響を受けていると言っても過言ではありません。あの、J.S.バッハも「音楽の花束」の写譜を持っており、そこから鍵盤楽器の技法を学んでいました。なるほどフレスコバルディのトッカータはバッハの奔放で華やかなトッカータに通じるものがありますし、バッハの厳格なフーガは「リチェルカーレ」に見られる書法そのものです。

（文責 大木）

#### J.S.バッハ：コラル前奏曲（我汝をよばわる、イエス・キリストよ）

バッハという人はとても有名であるし、トッカータとフーガ二短調なんて、あまりにも有名です。が、私が弾くこの曲は、そんなに有名ではない。けれどもとても美しい。私自身はタルコフスキーという映画監督の「惑星ソラリス」という映画にテーマのようにして使われているので聞いたことはあった。けれども、そもそもそれがバッハの曲だとすら知りませんでした。ただ、偶然にもこの曲と再会し、練習できるとこの曲に改めて魅せられてしまった。

さて、今こうして原稿を書いている、重要なことを忘れていたことに気づき、困っています。題名が思い出せない！どうも、覚えにくいのです。何ととっても、それまでドイツ語でしか題名を見たことがなかったから……。 （ここで執筆が中断） ですが、インターネットの Yahoo で検索したらすぐに分かった。やはりインターネットはすごいものです（ここでなぜ Google でないか、ということは全く重要ではありませんね。そんなことを思うのはどうも一部の人間に限られるように思いますが。また、そうして調べていると、結構有名な曲なのだ、と今更ながら思われました。検索して出てきたものによると、CVP-201 というヤマハのクラブノーバにデモ音源として内蔵されているらしいのです。だが、この型はもう生産終了だそうで、バッタリと出会ったと思ったら、なんだかさびしい気分にもなります。）

だが、この曲自体は当然そんなことは関係がありません。これは、バッハの「オルガン小曲集」というもののの中の一つで、この曲集はバッハの編曲技法の粋が見られるとも言われます。ただし、そんなことを知らなくても、遠いどこかへ響いていくようなとても美しい曲です。この二短調の響きは心の底に流れる悲しみを含んでいるようでもあります。それは元々のコラルの歌詞が、現世・世俗での名声や豊かさへの欲の愚かさを説きながら、神やイエスへと信仰心を歌うものだったからかもしれません。敬虔な気持ちと同時に現世への悔恨の気持ちがあつた、というように。音楽というものが、感情だとかメッセージだとかいうよりも、なにか「思い」というようなものを含んでいるように感じられる、私にはそんな曲なのです。

(文責 柴田)

#### モーリス・ラヴェル：亡き王女のためのパヴァーヌ

この曲はラヴェルが学生時代に作ったピアノ曲で、17世紀スペインの宮廷画家ベラスケスの『マルガリータ王女』の肖像画にインスピレーションを得て作曲したとの逸話がありますが、これはどうやら作り話とする見方もあるようです。フランス語で「亡き王女」は *infante defunte* となり、韻を踏む、単なる語呂合わせの言葉遊びである、ということです。

ところで、今回演奏に至った経緯もちょっとした遊び心から発生したものでした。ことの発端は私がフルートを持って練習に来て遊んでいたことから始まります。平澤くんが銀色に輝く笛を手にとったのが、夏真っ盛り。たちまちその音色に魅了され、今回の演奏会に出すまでの腕（口）前にまでなったのです。

パヴァーヌとは16世紀ごろに流行した宮廷舞曲の一つで、「孔雀」という意味の *PAVO* を語源としているそうです。優雅ながらもどこか現実離れたような不思議な音色を表現できれば、と思っています。

(文責 江間)

#### チャイコフスキー：〈くるみ割り人形〉組曲より

チャイコフスキーはただでさえ有名な人だけでも、この曲はそのなかでも特に有名な曲な気がする。ディズニーの「ファンタジア」でも取り上げられています。それだけ有名で親しまれるのは曲が面白いからだけれど、まずバレエの筋を説明しましょう。



《くるみ割り人形》はホフマンの「くるみ割り人形とねずみ王様」という作品を基にしたバレエで、クリスマスのお話です。ジルベルハウス家のクリスマス・パーティに変わり者のおじさんが奇妙な人形たちを持ってくる。少女クララはその中のくるみ割り人形が気に入るが、彼女の兄弟たちは人形たちを壊してしまう。パーティーも終わりみなは眠りにつく。けれどもクララはくるみ割り人形が気になって眠れない。そこでこっそり客間に戻ってみると、時計が12時を知らせ、ふしぎな光景が繰り広げられるのです。なんと、ねずみの王の軍隊と、くるみ割り人形率いる軍隊が戦争を始めるのだ。その最後にねずみの王とくるみ割り人形が一騎討ちとなるのだが、その時クララは思わず自分のスリッパを投げつけ、これをきっかけにくるみ割り人形が勝利をおさめることができます。すると人形は美しい王子に変身し、クララをお菓子の国の魔法の宮殿に招待し、さまざまな精たちが歓迎の踊りを披露する。と、まあこんなお話です。(スリッパを投げつけるのは良いのか、はたまた人形が化けたかもしれない王子に着いて行っても良いものか、そういった心配はないでもないわけですが、いいかげん曲のことを言って終わりましょう。)

まず「行進曲」。これはバレエの始めで、子どもたちがクリスマスツリーのまわりを飛び跳ねる場面の音楽です。実際飛び跳ねているような感じでしょう。弾く方はまさにそれを実感するのでして、手が鍵盤の上で跳ねるように弾かないといけない。ですが、そういった弾き方はどうであれ、楽しい曲です。

次は「こんべいとうの踊り」。こんべいとうの精は、クララが王子様に連れられてお菓子の国にやってきたときに出迎える精です。お菓子の国の女王というのがこんべいとうだとか。怪しく不思議な雰囲気曲で、「ファンタジア」ではその幻想的な映像が印象的でした。

最後に「アラビアの踊り」。出てくるのはアラビア産のコーヒーの精。何故アラビア？ どうしてコロンビア産ではないのか。コーヒーというのはもともとアラビアからその飲用が広まっていったのだそうですね。1260年頃、イスラム僧オマールが偶然出会った赤いコーヒーの実。当時惨禍にあったある町が、このオマールの祈りとその実によってエネルギーを取り戻し、以後この町は後にコーヒー豆の積み出し港となり、コーヒー豆の名前としても有名なモカの町となるのです。またオマールは地名をとって『モカの守護聖人』と呼ばれるようになったとのこと。ただ、曲に重要なのはアラビアの方で、東洋趣味の物憂い雰囲気曲です。ほとんどコーヒーの説明だな。。

(文責 柴田)

## フリッツ・クライスラー：前奏曲とアレグロ

ものすごい天才なのに、お茶目な偏屈家さん。これが私のクライスラーに対するイメージです。

クライスラーは音楽の都ウィーンの名ヴァイオリニスト兼音楽家で、その生涯でたくさんの有名な曲を残しました。しかし、そのほとんどの作品には、「～のスタイルによる」といった決まり文句があります。彼は演奏旅行中に訪問先の図書館や修道院の資料室でヴィヴァルディなど大作曲家の未発表の作品を大量に発見し、それを世に広めていって大評判となります。

しかし彼が 60 歳のとき、彼の何気ない一言から大変な事件がおこりました。彼が若い頃見つけたという未発表の作品というのが、全てニセモノだとばれてしまったのです。では誰が作曲したのか？そう、彼本人の作品だったのです。

当時の批評家たちは誰一人としてこのことを見破ることはできませんでした。

この前奏曲とアレグロは、19 世紀に作曲されたとは思えないほどとても荘厳な響きを与えます。見破られないのも頷けます。パイプオルガンの低く長く続く音色に支えられた、ヴァイオリンの祈るような綺麗な旋律はクライスラーならではの作品です。

(文責 江間)

## J.S.バッハ：8つの小プレリュードとフーガ 第4番 ヘ長調 & 第5番 ト短調

この8つの小品はバッハの自作でなく、ライプツィヒ時代の弟子 J.L.クレープスの作品であるとする説が現在有力なようです。一方で、曲内部の質的な不均衡（洗練された主題に対し、時に適切でない和声を取りつつ展開するぎこちない部分がある）から、バッハが弟子に「お題」を与えて作曲の練習をさせたものでは、との説も存在します。ともあれ、この作品集が現代にいたるまで入門編練習曲として多くのオルガン奏者に愛され親しまれてきたことには違いありません。

第4番ヘ長調については冒頭部分とパストラーレ（BWV590）最終楽章の始まりとの類似性がしばしば指摘されています。上記のバッハ「お題提示者説」のひとつの論拠でしょう。このプレリュードではあくまでもたゆたうような素朴な動きに終始し、天真爛漫な雅やかさに満ちた楽しい曲になっています。第5番ト短調はプレリュードの明るく澄んだ主題部、音幅の広いペダルソロ、シンコペーションの効いたフーガが特徴的です。

いずれの曲もシンプルであるだけに、音色の作り方や装飾音、演奏のテンポによって印象が大きく異なってきます。オルガン初心者が楽器の魅力を引き出す工夫を試み、その魅力を味わううえでも最適な曲集といえるのではないのでしょうか。

(文責 長嶋)

#### J.S.バッハ:フーガ・ト短調「小フーガ」

この曲は J.S.バッハの代表作の1つで、洗練された流麗な旋律が印象的な美しい小品です。小学校や中学校で音楽の時間に聞いたという人も多いでしょう。この曲が書かれたのは、バッハのヴァイマル時代、すなわちヴァイマル宮廷の音楽家として活動した時期で、バッハはこの時期に他にも多くの代表的なオルガン作品を書いています。

「フーガ」というのは、決められた旋律（定旋律）を対位的にさまざまな声部で繰り返し用いる形式で、バッハが非常に得意としていたものです。フーガは、フレスコバルデイの書いたようなリチェルカーレを原型とし、さらに、定旋律と組になる別の旋律（対旋律）や、フーガの中のフーガらしくない自由な部分（エピソード）など、さまざまな要素が加わったものです。この「小フーガ」も、最初に出てくるあの有名な旋律が右手の高声部、左手の中声部、そして足鍵盤の低声部で繰り返し登場するのでよく聴いてみてください。今回の演奏会では時代や地域、ジャンルを超えて人々の心に訴える名曲の数々を皆様にお聞かせしたいと思っております。そう、マリオの BGM も世界で親しまれている名曲ですから（こじつけではありません！）。

(文責 大木)

#### J.S.バッハ:《フーガの技法》より 対位法第一曲

これはバッハの対位法芸術の集大成と言える作品集で、バッハの死後、遺族らによって出版されました。多大な精力をつぎこんで、緻密な理論、強力な象徴表現によって編んだ大作ですが、すでにフーガは時代遅れとされており、息子エマニュエルの奔走に関わらず、この曲集は結局 30 部ほどしか売れず、銅板はつぶし値で売り払われる憂き目となったのです。

バッハの晩年の作とされ、最後の”Bach”の名を冠したフーガを書いている最中にバッハが死去し、未完のまま終わることになったと言われています。

ただ、これには異論があり、意図して最後のフーガを未完のまま残したのではないとも言われています。バッハは仕事やりっぱなしで去るような人間ではないし、作曲しながら死んで行くドラマの似合うタマではないので、おそらく何らかの意図があってわざと未完のような体裁にしたのではないのでしょうか。

この フーガの技法 では、スコアは4つのパートに分けて記されているのに関わらず楽器の指定はほとんどありませんが、演奏楽器としてはおそらくチェンバロが想定されていたというのが定説です。そして、曲によっては足鍵盤や、2台のチェンバロが必要とされます。

とはいえ、この曲集がその名の通りフーガを学究的に極めようという趣旨であるのだから、オルガンで演奏しようと、管弦楽で演奏しようと構わないと思われます。肝心なのは、フーガを愛する心である！

今回演奏するのはそのうち第一曲目（もっとも、この曲集、全体の曲順も不確定ではあるが）の単一主題フーガであり、この曲集の中で最も基本となるものです。しかし、4声が複雑に絡み合い、非常にバッハらしい曲です。

（文責 平澤）

#### J.S.バッハ:トッカータとフーガ ニ短調

おそらく、オルガン曲の中でもっとも有名な曲でしょう。オーケストラ編曲や、吹奏楽ヴァージョンの演奏も存在します。また、さまざまな映画で悲劇的な場面で用いられ、嘉門達夫以下の世代ならばクラシックに馴染みのない者であっても、「ちゃらり～、鼻から牛乳～」と言われれば、「ああ、あの曲か」とピンと来る。給食の時間に牛乳を飲んでいる者を笑わせて鼻から吹き出させた、小学生時代の懐かしき思い出を甦らせる哀愁の曲でもあるのです。

この曲は、通説ではバッハが1709年頃ヴァイマル宮廷でオルガニスト兼楽師長をしていた時に作曲したものとされ、あるいはさらに遡ってアルンシュタットのオルガニストであった頃の作とも言われています。アルンシュタット時代、当時20歳前後であったバッハは、休暇を無断で延長してリュubeckでブクステフデの演奏技法を学び、教会楽団のファゴット吹き相手に剣を抜く決闘騒ぎを起こす、血熱き青年でした。電撃のように駆け抜ける若々しさ、ブクステフデを髣髴させる幻想的な雰囲気と足鍵盤の激しい動きを要求するこの曲は、バッハのものだとすれば、アルンシュタット時代がもっとも相応しいでしょう。

しかし、バッハの曲としては、ユニゾンがやや多く、中間部の密度も薄い。「トッカータ～フーガ～トッカータ」という流れも、バッハの他の作品に見られません。また、作品を伝える資料もバッハ死後の筆写譜のみで、その信頼性は低いとされています。ゆえに、偽作とする説があり、私自身もそのように思っています。

しかし、作曲者がバッハであろうとなかろうと、アルンシュタットで作曲されたのだらうとヴァイマルで作曲されたのであらうと、構わないのです。この曲がオルガン曲として最もポピュラーであり、オルガニストの登竜門であることに変わりはないのです。

（文責 平澤）

## ~ Profile ~

### Organ

大木 真人 Masato Ohki

オルガンときたら仕様書を読むだけでも興奮するという末期のオルガンヲタクで、最盛期には週 1 回くらいオルガンの演奏を聴きに行っていた。この同好会には出会って半年になるが、実はオルガンなんて弾いていなくても居るだけで楽しめる秀逸な変人集団である。

大学院から東大に来た「転校生」、理学系研究科修士 1 年。専門は宇宙科学。いま、研究と音楽の両立に必死で就活ができないという問題を抱えている。

鹿島 真人 Masato Kashima

4 代前からクリスチャンという家で育つも、そこまでキリスト教に親しみがわかず、洗礼は受けていない。でもたまに、オルガンを聞きに教会に行っている。

東京大学 YMCA という寮に住んでいて、礼拝堂のリードオルガンで自由に遊んでいる。あまり足鍵盤を使えないため、つい手鍵盤だけの曲に逃げがちだが、今回はヴァイオリンとのアンサンブル曲で足鍵盤に初チャレンジ。

音楽をやっている時だけ「神はいる」と確信する瞬間がある。

東京大学思想文化学科倫理学専修に在籍。現在 3 年生。

柴田 康太郎 Kotaro Shibata

オルガン同好会には初めの頃からいる。けれども、友人たちから練習しろという視線を感じながら、毎度ろくに練習していない気がする。いや、今なぞは、早く原稿を出せという声にも駆られて原稿を書いている。申し訳ない。だが、私のようなのらりくらりとした人間でもいられる、あんなヤツ、こんなヤツの集まったこの集団は変なところだけど、面白い。もちろん、オルガンを弾くのもやはり特別な気持ちになれる。このオルガンは、華やかさという点ではオルガンとしてはもう一つという気もする。が、私はこの素朴な音が気に入っています。

今は文科三類二年。来年は美学藝術学を専攻する。

長嶋 由紀子 Yukiko Nagashima

結構（とっても）長い社会人経験を経て、今年4月から人生3度目のフルタイム学生生活中。以前からファンだった駒場オルガン・コンサートで春に配布された学内報で同好会の存在を知り大喜びしました。「本物のパイプオルガン」を自由に弾ける機会なんて、普通そうあるものではありません。同好会に感謝！最近、大学院入学目的は実はオルガンだった？という疑惑の目を家人から向けられています。いいえ、そんなことはない・・・と思います。

人文社会系研究科文化資源学研究専攻、修士1年。

## Organ/Flute

平澤 歩 Ayumu Hirasawa

前回の演奏会以後、フルート・ちくわ等、楽器のレパートリーを着実に増やしつつあるが、肝心の鍵盤楽器の練習がおろそかになっていることに気付く。しかし、そこは永遠のチャレンジャー、今回は、へたくそと言われようと身の程知らずと言われようとミーハーと言われようと、かの有名なトッカータとフーガ二短調に挑戦。……うーん、思いっきりミスって、終わった後でも頭の中で「ちゃらら～、ちゃらららら～ら～」と鳴ってそう。。

現在、文学部中国思想文化学専修過程に所属する3年生

## Violin/Organ

江間 有沙 Arisa Ema

小学生のソナチネでピアノにさようならを言い、以来ヴァイオリンとヴィオラを相棒として生きてきたものの、何故か今回オルガンを弾くことに。久しぶりに弾く鍵盤楽器に夢中になるあまり、本職のほうをないがしろにしがち。駒場残留という特権をいかし、ほぼ全ての練習に来ているものの練習しないので上達せず。

一緒にいるだけで楽しい仲間がいるからおしゃべりしてしまうのですね。。

何故か最近女帝とか言われ始めている教養学部広域科学科3年。

## ～Epilogue～

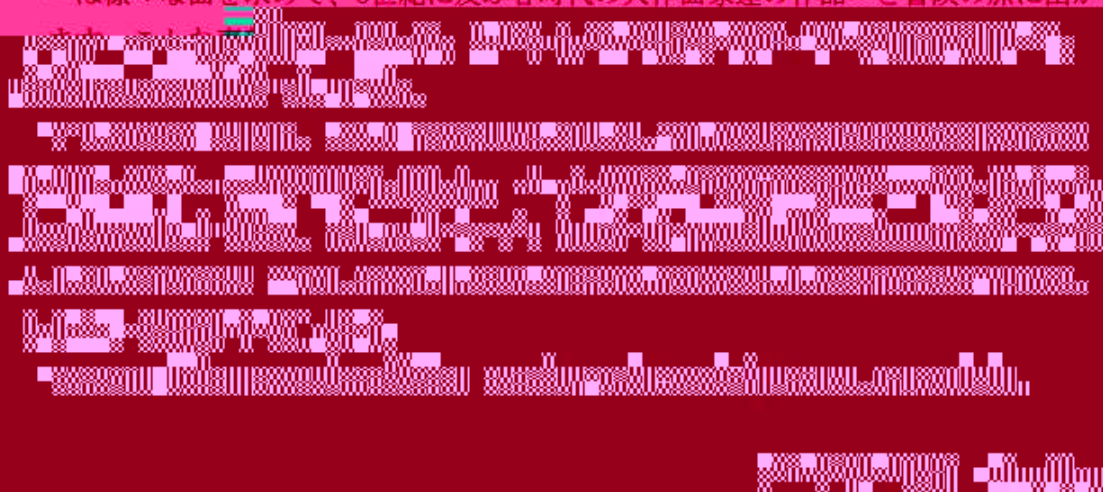
♪ちやらっちやっちやちやちやっ ちゃん

オルガンの周りにはリズムに合わせて躍っている人、ストップをで変更させて音色を変えてる人、ニコニコと笑みを浮かべている人々の姿が。

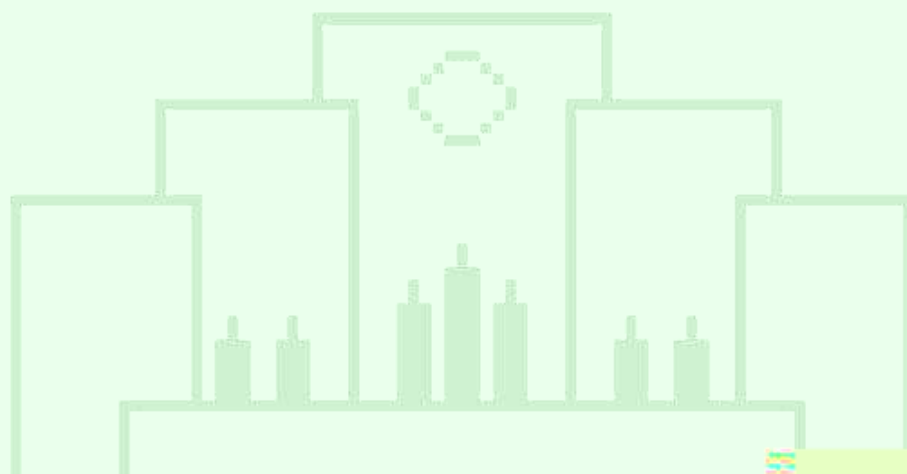
『次回演奏会のテーマはマリオで！』

そんな提案も通ってしまう、自由で楽しい同好会です。

今回のプログラムは前回よりもさらに時代の幅が広がり、オルガン同好会のメンバーは様々な曲を求めて、6世紀に及ぶ各時代の大作曲家達の作品へと冒険の旅に出かけ







200

**Thank you!**  
**well...**

**Again?**

